



静中・静高関東同窓会
会報 第48号
平成11年12月15日発行
編集人 上杉重吉

静中の頃の思い出

43期 長戸寛美

私はこの十月の二十四日の誕生日で満八十九歳になった。旧制静中の43回生だが、私が

うれしかったことを覚えてい

静中のご厄介になったのは四年の一学期の終りまでで、二学期には広島府の中学に転校していたから、正確に言えば、私は静中の卒業生ではない。その頃の親しい友人には、まず、三宅静雄君がいる。三宅君は、かなり大人びていて、何か犯しがたいような所があった。二年生の頃であつたか、題は忘れたが、私が書いた短文を三宅君に見せたところ、「これは良い。よく書けているよ」と、いつも余りひとをはめたことのない同君が珍しくほめてくれたので、とても

在京の同窓会で度々会うようになってから気がついたことは、三宅君は、顔も姿も話しぶりも時々見せるしくさも、老いを感じるような年頃になつても、中学生の頃と本筋ではちいとも変つていないことだ。そういえば、この点、西沢純三君も同様で、それだけ、二人は、中学生の頃から大人びていたのかも知れない。草深に聖公会という基督教の教会があつて、その牧師の子に植村君という友だちがいた。真面目な勉強家であつた。家にも遊びに行つたが、私は元来門徒寺の子であつた

から、各々自己の宗教を守つてはいたが、中年になり、神戸辺の牧師になつていた同君と一時文通を交すようになったが、いつかそれも絶えてしまった。大海君という軍人の子がいて付き合つていたが、やがて、軍の学校へ転校した。こうしてみると、私は、付き合い嫌いというわけでもないのに、友だちは意外に少なかつたようである。

私は、城内尋常高等小学校の出であるが、城内から橋を渡つて、鷹匠町の方に出ると、小河直人君、八剣君などの友だちがいた。八剣君は双子の兄弟で、とてもよく似ており、どちらが兄で、どちらが弟か区別がつきにくかつたが、幸い（？）、ひとりが中学に上がり、ひとりが商業に行つたので、われわれは、変に安心したものである。八剣

感謝・感激が

続いたこの1年！

母校野球部の健闘に心からの拍手を送り、大正・昭和・平成各期活躍の軌跡をたどり、春夏4回出場された伊藤重久二塁手（48期）の傾聴に値する回顧談など……

甲子園関連を8ページにわたり特集！

君たちの家の少し奥の方に丸山医院という病院があつて、その院長のお子さんのひとりが西沢純三君である。ご養子にいかれたのだらう。その頃から背が高く、教室では後列にいた。

世話好きで、在京の四三会がしばしば開催できたのも、静岡三笑亭の方の四三会と連絡をよくつけてくれたのも、

長戸寛美氏略歴

東大法学部卒。昭和10年12月検事任官。その後、東京地検検事、法務省刑事・総務課長等を経て、甲府・長野地検検事正、法務総合研究所長等となり、高松・広島高検検事長を歴任、最高検察庁次長検事を最後に昭和48年10月定年退官した。同年11月、弁護士（第一東京）となる。現在は、仕事はしていない。

すべて、西沢君がおられたからで、私は、いつも感謝していた。それに、会報にも、こまめに会合の記事を寄せてくれている。同君は、老来いよいよ元気で、ゲート・ボールの会にもかかず出ておられるようだ。足首の関節炎でヨタヨタしているボクの到底及ぶ所ではない。

水落に国友銃砲店という銃砲屋があり、その子の国友君が高名な野球選手である。背も高くスマートだった。野球といえば、今年の静岡高校の甲子園での活躍は、善戦健闘、まことに見事で、三回戦の桐生第一との試合はほんとうに惜しかった。来年に期待したい。がんばつて下さい。静中に「お嬢さん」というあだ名の国語の先生がおられた。お名前を忘れていたが、西沢君に聞いたとおり、なる

ほど、中野先生だ。一年生か二年生の頃であったと思う。「日米親善の手紙」というのを書いてアメリカに送る、というのだった。私は選ばれて書き、お嬢さん先生に提出した。全校に何人というふうに選ばれたのか、学年ごとに一人というふうに選ばれたのかは定かでない。アメリカへ出す直前になって、私の書いたものの一部を書き直すことになり、もう日付がないので、日曜日に人力車で先生の御宅に駆け付け、先生のご指導でその部分の書き直しをさせて頂き、提出したことを覚えてる。

の中に駆け込んだ。当時は情報伝わらず、震源地は県内の鈴川だといっていたが、夜になると、東の空が真っ赤で「東京・横浜は全滅だそうだ」などという風説が飛んだ。安東村に有名な焼き芋屋があった。さつまいもを切らずに、一本丸ごと焼くのが有名で、とても美味かった。学校では、登・下校の折にその芋を買い喰いすることは禁じられていたが、私は、偶に禁を犯して、この焼き芋を買い、家に持ち帰って、家族で食べたことがあった。

—— 思い出は尽きないが、紙数も尽きた。それにしても、亡くなった方や、病人が多い。最初に書いた三宅静雄君も、東大名誉教授で、元同大学物性研究所長で、朝日賞を受賞された学究の徒であったが、本年七月三十一日死去された。享年八十八歳。惜しいことであつた。私も足痛で、日比谷や銀座の諸会合にも出られず、今は閑居して、もっぱら、好きな読書三昧というところである。

(平成一一・一〇・一三記)

第25回関東同窓会総会・懇親会 百二十三名参集して懇談！

六月二十五日(金)、平成十一年度の関東同窓会総会が午後六時より恒例の会場、新日本証券の地下大食堂に、来賓三氏を含め百二十三名参集して行なわれました。

今年から総会にも一工夫こ



堀尾弘和教頭先生

川村春雄会長

らそうということで当番幹事制を採用、77期が担当し、また講師として山川静夫氏(67期)において願って、楽しい話(次掲)を聞くことが出来ました。

総会は、飛入りで山梨由記氏(73期)に指揮揮っていただき、校歌を意気高らかに斉唱して始まりました。

奥沢徹関東同窓会会長(59期)より挨拶があり、会長就任一年間の経過と同窓会活動を今後もっと活性化したい、そのためには若い人たちのより積極的参加を望みたいとの話がありました。

議事に移り、平成十年度事業報告、決算及び監査報告、平成十一年度事業計画並びに予算案が各々承認・可決されました。

次いで山川静夫氏の今春の選抜大会に関連するおもしろいエピソードなどを伺ったあと、来賓の本部同窓会会長川村春雄氏(46期)から祝辞と来たる平成十五年の母校創立百二十五周年記念事業の件で話があり、協力の依頼がありました。また母校校長として今春着任した野崎耕一先生の代理として出席の堀尾弘和教頭より今春の選抜出場の報告と募金協力へのお礼などの話があ

りました。

懇親会は出席者の中で最長老の西沢純三氏(43期)と最若手の瀧徹哉君(106期)のお二人の乾杯の音頭で始まりました。和気あいあい、いくつもの話の輪が出来、山川静夫さんを中心にした記念写真が何枚も撮られました。

最後に来年の総会幹事を78期諸兄にお願いすることと、夏の甲子園出場を期待して校歌の合唱、さらに応援歌・道遥歌も歌い、来年の再会を約して閉会となりました。



山川静夫さんのお話

まず浦田彰さん(71期)より山川さんの輝かしい経歴が紹介され、特に三越劇場で行なわれ、近く30回目になる「山川静夫名人劇場」の説明がありました。また山川さんを「山川の兄^{あにい}」として慕う村松友視さんの駿河ビーブル物語「だけん、人はいいだよ。」(巻末にお二人の放言対談あり)〈静岡新聞社刊〉の紹介がありました。

話は静岡人の特性(シャイで出しゃばらない、傍観者を



決めこむ、が妙な所で出てくるなど)から始まり、今春の甲子園でのエピソードをおもしろおかしく話してくれました。1回戦の柏陵戦に勝って新大阪で新幹線に乗る際、山川さんは間違って回送列車に乗ってしまった、発車した列車を非常コックで止めたあとホームまでもどった話。新幹線車両の大きさに今さらながら驚いていました。

31年にNHKに入局して神宮球場での新人研修の様子からアナウンサーとして話す内容に何が大事か、それは視聴者が何を最も聞きたがっているかである事、盗塁の3・8秒の間にすべての場景を話すことが出来なければならぬなど、伝えるということよりも伝わることの大事さを話してくれました。

また、この関東同窓会総会も、出席した同期だけがかたまつて話しているだけでは何にもならない。世代を越えた交流を心がけなくてはいいけない。——忘年会

にしても一年を忘れる会ではなく、年を忘れ年齢を越えて老いも若きも仲よくやるということであると話してくれました。

(77期 清水 雅尚記)



XXXXXXXXXX 平成11年度総会(6月25日)出席者(敬称略) XXXXXXXXXX

原	奥沢	小花	青木	59期	山中	影島	岩井平	57期	清水	56期	居初	安東	54期	橋本久	徳永	大石	53期	原崎	51期	丸尾	50期	菅沼	49期	西沢	43期	藤山	本部幹	川村	本部会	堀尾	母校教
淳	徹	敏郎	静男		孝二	利邦	一郎		逸郎		良雄	哲夫		仁寿	悠久	巖		郁平		文治	栄		純三		昌弘	幹事	春雄	会長	弘和	教頭	
児島	小杉	小坂	黒田		岡村英	大石	朝比奈	67期	増井	田中	小嶋	木村	内田	石川	66期	野沢	佐野	64・65	清水	大石	61期	山本雅	原	時田	堤	新間	小林	上杉	井田	増田	
英男	弘	博	秀幸		三	修而	正三		和夫	俊男	清司	敏夫	幸雄	隆亮		正憲	旭	5期	澄夫	次男	之助	善三郎	正康	崇	昌輝	金次	重吉	淳	真一		
梅原	海野	青木庄	71期		中村	大長	関	久沢	北村	石山	70期	松島	神谷	69期	吉崎	星野	塚本	鈴木	河口	大石	秋山	68期	山川	山岡	溝口	丸山	増田	増田	福原	鈴木	
孝九	幸雄	二	宮本		竜二	智	哲男	正雄	孝	博	76期	玲子	貞子		英輔	敏郎	浩司	俊彦	浩	康博	和也	73期	静夫	進	淑郎	英久	安国	智一	享一	敏行	
仁科	清水	後藤	大村		岩崎	石間	飯田	77期	北川	池田		松下	佐藤	74期	山梨	三浦	深澤	仲川	杉山	後藤	青木俊	7期	山口	深田	夏目	72期	曾根	後藤	栗田	浦田	
光司	雅尚	嘉代	信子		敏宏	啓一	善久		博昭	哲郎	76期	晴一	鐘司		由記	英夫	靖男	信正	正三	孝子	俊一郎	73期	公子	均	雅之	72期	幸一	弘枝	甲子男	彰	
			瀧		石井	95期	大羽	93期	村松	91期	川島	小川	90期	鳥巢	89期	新井	新井	筑輪	高橋	石川	牧野	池田	85期	永井	鈴木	78期	村松	三浦	松永	野方	
			徹哉		克昌		章弘		秀明		雅行	修史		修		暢宏	名雄	宏	嘉和	英敏	幸司		昌義	藤男		貴彦	位通	秀夫	重人		

甲子園四題

宿願

賤機一望駿府春
穿雪富士聽鶯聲
球兒制霸甲子園
老青朋友共悅歌

連征

入伏熱浪油蟬鳴
過東竹林風清涼
去夏連征甲子園
岳南健兒盼優勝

甲子園四題

宿願

賤機一望駿府春
穿雪富士聽鶯聲
球兒制霸甲子園
老青朋友共悅歌

連征

入伏熱浪油蟬鳴
過東竹林風清涼
去夏連征甲子園
岳南健兒盼優勝

激突

南北激碰第三戰
傳統名門互不讓
幾千幾萬追一球
高唱校歌甲子園

惜敗

炎熱陽下一戰
老朋親友血潮燃
從天不來錦標風
龍鳳球兒祝發展

宿願

賤機山から一望する静岡には春一杯の美しい風景がながめられる。白雪をかぶっていた富士山も雪がとけはじめて所々に黒い土が見え隠れしている。あちこちからは鶯の啼き声も聴こえてくる。

久しく待ちに待っていた春の選抜に、わが静岡高校が選ばれて、勇躍して甲子園へ出陣する。やるからには優勝を目指して存分の戦いを挑んで欲しい。

老いも若きも、心は一つ、勝って歓喜の歌を高らかに歌いたいものだ。

連征

炎熱の夏がやって来た。油蟬の啼き声がうるさいほどやかましい。竹林を通り抜けて来る風が、さわやかな涼しさを感じさせる。

激戦の予選を勝ち抜いて、静岡は春に続いて甲子園へ駒を進めた。優秀な素材に恵まれ、猛練習で鍛え抜いた母校に、大正十五年の全国制覇の再現を夢見たのは不思議ではない。現役も先輩も、否静岡に関係する全員が、優勝の一瞬を願って、戦況の一瞬一瞬

をまなじりを決して見つめていた。
盼（黒目と白目がはっきり分かれてること。熱望する、目を輝かせて待ちのぞむの意）

激突

一、二戦を順調に勝ち抜いて第三戦。南のわが静岡高に対するのは、北の桐生一高。互いに高木、正田という大会屈指の好投手を擁しての激突、事実上の決勝戦とも見られた。幾千幾万のファンの眼は、一球の行方を追って熱狂した。「岳南健児一千の理想は高し……」の校歌は満員の甲子園に鳴り響いていた。

碰（日本では古来使わない漢字。意味は堅い石と石とがぶつかり合うさまをいう）

惜敗

灼熱の甲子園に展開されたこの一戦はわが静岡高が僅かなチャンスを生かして先手をとって有利な局面で進められ、正に血湧き肉躍る想いで勝利の決着を待望したのだが……。天は我に錦の御旗を賜わることなく、桐生の逆轉を許して、惜敗という無残な試練を与えてくれた。

泣くな球児たちよ。明日も

八月七日、参加四千九十六校から勝ちあがった代表四十九校の選手達が入場行進——中央、カメラマンの前を行く母校、静高野球部！



「甲子園球場」、野球を愛する私たちにとって、何と心に響く言葉なのでしょうか。

(「宣誓」より)

激突

南北激突第三戦
傳統名門互不讓
幾千幾萬追一球
高唱校歌甲子園

惜敗

炎熱陽下又一戦
老朋親友血潮燃
從天不來錦標風
龍鳳球児祝發展
乙卯伏日

芹澤五郎作
大石 巖書



ある。来年もある。

龍となり鳳となつて天空を雄飛して、天下を制圧する日のために、更に一層の研鑽を積んで前進することを祈念する。

「甲子園連作」に寄せて

この詩の作者は53期の芹澤五郎氏（静岡市安西一丁目二七に在住）で私の中学時代からの親友の一人。中学の頃は水泳部の一員だったが、競技そのものには輝かしい結果は皆無であった。しかしそのことは彼にとって意に介すべき問題ではなく、悠揚としてわが道を堂々と歩き続けられ、それでよいとする人であった。社会人になって台湾や中国との係わり合いをもつ仕事に携わり、漢詩に馴染むことになったのであろう。

彼によれば二千年前、漢の時代の演歌の積りで、難しい平仄や用語にこだわらずに駄作を楽しんでいると白状している。素朴でありのままの感情や想いを、そのまま漢詩に託して表現し、たえず今日を楽しみだけでなく、明日に夢を描き続ける老人がうらやましい。

彼こそ人生の達人なのだろう。

ところで彼の「甲子園四題」の解説は、彼の域にはとても達することの出来ない私の勝手な拙訳である。彼の意に添い得ない箇所がいくつもあることは承知しながら、彼ならば許してくれるだろうと決めてかかったものだから文責はすべて私にある。許していたきたい。

桐生に惜敗したとき、私に寄せられた手紙の一部を最後に紹介したい。

「戦いに勝って勝負に敗れた惜しい戦いでした。あの純白のユニホームも甲子園に映えていたが、何よりも選手諸君の一人一人が品の良い、瞳の輝いたいい顔をしていたところがうれしかった。伝統はいつまでも輝いており、それを誇りに思っているのは私一人ではないと思っています。」
最後に。この夏は甲子園のお蔭で、記録破りの炎暑の続く中、清涼な気分を味あわせてくれた、静高野球部の益々の隆盛を祈ります。来年も頼みますよ。

(53期 大石 巖)

我々同窓生の一体感を
再燃させてくれてありがとう！



球場正面を飾る、栄えある優勝校の校旗。

実力では準優勝？

44期 白井 茂

3回戦の対桐生一高戦。高木が快調にとばし7回まで11三振を奪い2対1でリードしていた。しかし長打が一本出ると鈴木監督はサツと市川に代えてしまった。その市川が不出来で死四球の連続のあと安打を浴びて逆転されてしまった。早めに切り換えた作戦が裏目に出てしまった。

プロ野球でもよくあることで、この夜の中日巨人戦では頼みの横原が関川に打たれて逆転負けしている。中日三連

戦の大事な星を落としたわけ、この一戦の負けで巨人はついに中日に追いつくことができなかった。

静高もこの一戦をモノにしていたらあるいと思うのは結果論で、ヨミとはそれほどむずかしいものだ。

大正15年、私たちが三年生のとき静中は思いがけなく全国優勝してしまった。上野・福島のパツテリーで1回戦で優勝候補の早実と当り、名投手高橋を打ち崩し9対2で破ると波に乗り、2回戦で前橋中学と対戦、丸橋、上野の投手戦となり延長19回、6対5

で振り切った。

当日私は朝日新聞静岡支局長の長男萩田佑君(41回)に応援を頼まれ、支局の張り出しを手伝っていた。ラジオはあったが野球中継はまだはじまっていなかった。イニング毎に号外用の赤いワクの大きな紙に「戸崎中飛、築地三振、国友遊園」と書き、支局の板塀に張り出していたが12回あたりで張るスペースがなくなってしまう。隣りの織平呉服店のウインドーを借りて張っていた。支局の前の呉服町通りは、一千人近いファンが詰めかけ、お巡りさんも整理をあきらめる仕末だった。準決勝では四国の高松中学、宮武、水原のいる常勝高松商業を破って出てきた強豪だが、これも5対1で降していよいよ決勝戦へ(なお、このときの高松中学のベンチには三年生で補欠の三原脩と、一高から東大法学部に進み投手で四番を打って六大学で活躍した梶原英夫君がいたが南方で戦死してしまった)。

決勝戦は優勝候補の和歌山中学を破った大連商業で、円城寺、桜井のパツテリーと上

野が投げ合い1対1で迎えた

9回、安打で出た福島を小河のスクイズで迎え2対1で振り切った。支局前のファンは万歳、万歳でいつまでも去りやまずでいると、やがて朝日新聞の飛行機が「祝全国優勝」の号外をばらまいていた。

優勝チームが帰静すると旗行列、提灯行列で全市が何回も沸き立った。その年の暮に大正天皇が亡くなり昭和になったから七十三年も昔のことだが、良い思い出になっている。

上野、福島は慶応へ、円城寺、桜井は法政に進み、六大学リーグ戦でも投げ合ったが、福島は胸を病み袖師で療養していたが亡くなった。

勝ち抜くことの難しさ

48期 伊藤 重久

今夏の暑さは格別で、体調を崩した人も多かったようだ。

夏になると、全国で色々なイベントが行われるが、何といても注目的は甲子園の全国高校野球選手権大会である。これが始まると、老いも若きも、野球ファンは勿論、

平素余り野球に関心のない人までがテレビにかじりつき、

その眞摯なプレーに一喜一憂し、心からの声援を送る。正に日本独特の眞夏のイベントである。

あの猛暑の中で、我々にさわやかな涼風を送ってくれたのが、母校野球部選手甲子園での活躍であった。

春の選抜大会では昭和五十五年以来十九年ぶりの出場を果たし二回戦で敗退したが、久しぶりに、東海の名門静岡の台頭を喜び、夏の大会出場を期待した人は多かったと思う。

その後、部長・監督の御指導のもとに、選手諸君の地道な努力の甲斐あって、昭和六十二年以来十二年ぶりに夏の大会に出場することが出来た。

春夏連続出場は実に三十九年ぶりの事で、これは大変な偉業といえる。

結果的には三回戦で本大会の優勝校桐生一高に四対三で敗れたが、その主将が優勝の感想の中で、静高との対戦が一番苦しかったと話していたの聞いて、如何に静高が最後迄粘って戦いぬいたかが分り、応援して下さった方々の期待に充分応えたものと思う。

実は私も昭和五年、三年生になると共に入部し、伝統ある母校野球部の一人として、甲子園出場を目ざして練習に励んだ。

図らずも、その年の五月、天皇陛下静岡御臨幸の折、静岡との天覧試合があり、補欠として出場し、大いに感激した。

そして夏の甲子園大会に補欠としてはじめて甲子園の土を踏んだが、球場の大きさと、何ともいえない大会の雰囲気、に圧倒されたのを今でも憶えている。全国的に注目されたが、準々決勝戦で強豪和歌山中に敗れた。

四年生になり、春の甲子園大会に初めて二塁手として出場したが、名門第一神港商業に敗れた。更に夏の大会出場を目ざし練習に励んだが、地方予選で神奈川県代表の商工実習に敗れ、春夏連続出場の夢は消えた。

五年生の春の大会では大阪の八尾中学に敗れた。更に念願の春夏連続出場を果たしたが、後にタイガースで大活躍した影浦氏等名選手のいた松山商業に二対一で逆転負けを

喫し、私の甲子園は終わった。

当時の投手は有名な鈴木芳太郎（後に八木姓）君で、彼の力量は超中学生級といわれ、文字通り投打に大活躍した。

我々バックがもう少し力があつたら、もっと良い成績を残せたのではないかと、今でも残念且つ申しわけなく思っている。

甲子園の壁は厚く、勝つことが如何に難しいかを身にしみて感じている私は、今夏の母校選手諸君の活躍が如何に素晴らしいものであつたかよく分る。

母校を卒えて七〇年、現在の選手諸君は体格も良くなり、技術も格段に進み、総合的に可成りレベルが高い。

秋を迎え、新チームとなり更なる飛躍を目ざして練習していると思うが、二人の好投手の穴を埋めるのは仲々容易なことではない。どうか監督の指導のもと、力を合せて伝統の野球を通じて人間形成をモットーとして次代を背負って立つ気概を忘れずに精進して欲しい。

* * *

我々四八期生は毎年四月十八日、静岡で集まるが加齢と共に出席者が減り、今年は二十一名（内夫人三名。海野司郎君未亡人含む）であつた。

毎年今治市から遙々夫人同伴で出席の加藤正秀君は、大正十五年母校が夏の甲子園大会で優勝した時の名監督、加藤周蔵氏の長男で、野球部のOBでもある。

話は当然春の甲子園大会での母校選手の活躍ぶりを中心で、殆どの方がよくテレビを見ていた。そして今年は好い投手が二人もいるし、守備も良いから、努力すれば夏の大会も有望だという意見だつた。あの夏の大会での戦いぶりを見て、我々の仲間は「トシ」をとつても「もの」を見る眼は確かだなと嬉しく思っている。

一年ぶりの会とあつて話題はつきなかつたが、加藤君の音頭とりで校歌と応援歌を声高らかに歌って、来年の再会を約し解散した。

会員中、足腰が弱くなって欠席する人が多くなるにつけ、つくづく健康の大切さを痛感している昨今である。



夏の甲子園大会

20 回出場の大偉業をたたえて

57期 影島 利邦

本年夏、静高野球部は県予選を勝ち抜き、静中以来通算 20 回目の甲子園出場を果たした。大会では 3 回戦で惜敗したが、選手諸君の健闘に改めて拍手を送りたい。

ところで一口に 20 回といっ

ても、それは生易しいものではない。夏の大会は全国中等学校優勝野球大会として、大正 4 年大阪府下豊中グラウンドで開始された。以来年々とも隆盛の一途をたどり、大会球場も鳴尾球場を経て甲子園へと変った。戦時に 5 年の空白があり、また昭和 23 年には学制改革で全国高校野球選手権大会と改称されたが、本年度で 81 回を数える。80 余年の間には、社会経済文化など各分野で地滑りの変動もあったが、その中で一つの学校の野球部が風雪に耐え、連綿として伝統を受けついでいくことは至難のわざであろう。

高校球界をみると、本年夏の地方予選に参加した高校は全国で四〇九六である。筆者の調べでは、この中で 20 回以

上の出場校は次の通りで、静高を含めて 11 校にすぎない。

北海高 33 松商学園 31 平安高 27 早稲田実 26 松山商 25 県岐阜商 24 中京高 22 広島商 21 鳥取西高 21 桐蔭高 (旧和歌山中) 20

さらに大正、昭和、平成の各期に、ことごとく出場しているのは、静高を含めて 6 校である。

このようにみてみると、20 回出場は一大金字塔であるといつても過言ではあるまい。

以下、この 20 回に及ぶ野球部の甲子園での軌跡を追うこととする。

大正 13 年 (第 10 回大会)

初出場。奇しくもこの年甲子園球場が竣工し、開幕試合は静中対北海中であつた。5 回表静中に満塁本塁打が出て 4 点のアヘッド。しかし追いつかれて延長に入る。12 回裏決勝の 1 点を許し、4 対 5 で敗れ、初陣を飾ることができなかった。

大正 14 年

2 年連続出場。

2 回戦 愛知一中 3 対 2
準々決勝 高松商 1 対 4
大正 15 年

3 年連続出場の静中は、全国制覇の快挙をなしとげ、深紅の大優勝旗を岳南の地にひるがえた。

2 回戦 早実 9 対 2

準々決勝 前橋中 6 対 5

この試合は球史に残る延長 19 回に及ぶ熱戦となつた。1 対 5 で迎えた 8 回裏、静中は一挙 4 点をあげて 5 対 5 の同点とし、延長となつた。19 回裏、二死走者なしから四球、中前安打を二本続けて決勝点をあげた。

準決勝 高松中 5 対 1

決勝 大連商 2 対 1

8 回を終つて 1 対 1。9 回表静中、先頭打者が安打出塁、次打者のバントは投手の悪投で走者一、三塁、一塁走者二盗、ここでスクイズが決まり

決勝点となる。当時、関西が野球王国であり、東京、北四国がこれにつぐ地域であつたから、神静代表静中の優勝は、識者にとり驚天動地のことであつたらしい。

昭和 2 年

連続 4 年の出場。

2 回戦 早実 4 対 5

昭和 4 年

2 回戦 水戸中 5 対 1

準々決勝 広島商 2 対 4

1 対 1 で延長。11 回表、守備の乱れから 3 点を献じ、その裏 1 点を返したが及ばなかつた。

昭和 5 年

2 年連続出場。

2 回戦 愛知商 5 対 4

準々決勝 和歌山中 3 対 4

昭和 7 年

2 回戦 松山商 1 対 2

松山商は中京商、明石中とともに、三強の一角。しかし静中は 2 回の 1 点を守り、1 対 0 で 9 回裏を迎えた。二死走者二塁から三連打を浴び、逆転負けを喫した。掌中の珠を逸する、惜しみても余りある敗戦であつた。

昭和 7 年の出場を最後に、静中は終戦まで甲子園に駒を進めることができなかった。善戦するも報われない、試練の時期であつた。

未曾有の敗戦にもかかわらず、終戦の翌昭和 21 年 8 月、夏の大会が再開された。

昭和 23 年には学制改革で中等学校が高等学校となり、大

会の名称も全国高校野球選手権大会と改められた。静中も 23 年 4 月に静岡第一高校、24 年 4 月に静岡城内高校、そして 28 年 9 月に現在の静岡高校と名称変更がなされている。

昭和 23 年 (第 30 回大会) 高校野球大会となつたこの年、静中改め静岡一高は実に 16 年ぶりの甲子園出場となつた。

1 回戦 成田高 6 対 3

2 回戦 岐阜一高 1 対 3

昭和 24 年

静岡城内高と改称され連続出場。

2 回戦 芦屋高 3 対 6

昭和 26 年

1 回戦 高知商 3 対 9

昭和 30 年

静高として初出場。

1 回戦 城東高 0 対 3

城東高は南四国代表で高知県の学校。下馬評は静高優位であつたようである。

昭和 31 年

2 年連続出場。

1 回戦 伊那北 1 対 4

この年 5 月、甲子園球場にもナイター設備が完成。対伊那北戦は初日の第 3 試合で、8 回表から初ナイターとなる。

試合は1対1で延長に入り、

10回伊那北、静高内野陣の乱れに乗じて3点をとる。初ナイターをものにできなかった。

昭和35年

苦戦接戦を乗り越え、34年ぶり2度目の決勝進出となったが、強豪法政二高の前に散る。

1回戦 大杜高 2対0

2回戦 秋田商 1対0

準々決勝 北海高 3対2

準決勝 徳島商 3対1

決勝 法政二高 0対3

4回まで緊迫した投手戦で0対0。法政二、5回表二死二塁から二塁打で1点。6回二走者を置いて三塁打が出て2点追加。0対3で涙をのむ。

昭和38年

1回戦 市立西宮高 4対1

2回戦 銚子商 3対4

4点差を必死に追ったが、届かなかった。

昭和45年

1回戦 高松商 0対16

高松商の猛打に泣く。

昭和48年(第55回大会)

3年前の憾みをはらすが如く、13年ぶり3度目の決勝戦に臨む。試合はわれに利あらず、惜敗。優勝旗を山陽道に

もつていかれた。

2回戦 長崎海星高 10対0

3回戦 天理高 7対0

準々決勝 銚子商 5対3

準決勝 今治西高 6対0

決勝 広島商 2対3

打力に勝る静高がわずかに上回るとみられていた。しかし1回裏に2点を先制され、これを追いかける展開。6回と8回に1点ずつとつて2対2の同点とし、逆転に望みをかけた。だが、広島商は9回裏、一死満塁からスリーバントに成功、決勝点をあげ、静高無念の敗戦。長蛇を逸するとはこのことか。

昭和53年 (第60回大会)
(学校創立百周年)

1回戦 鹿児島実 4対3

2回戦 熊本工大付 3対5

2点差を8、9回に1点ずつとつて同点とし延長に入る。13回表、熊本工大付3点奪取、その裏静高必死の反撃も1点どまり、健闘も空しかった。

昭和57年

1回戦 池田高 2対5

この年の池田高は強すぎた。静高は水準以上の力を持ちながらクジ運が悪く早々に姿を消したのは惜しいと評された。

昭和62年

2回戦 関西高 2対6

平成11年(第81回大会)

12年ぶりに待望の20回目の出場。19年ぶり14回目の出場となった春の選抜に続いての甲子園である。

1回戦 倉吉北 8対0

2回戦 甲府工 3対2

3回戦 桐生第一 3対4

以上、静中静高野球部の、夏の甲子園での奮闘を略述した。静高野球部にとり20回目の出場は、通過点であろう。今後の活躍を期して待ちたい。

ところで、これまでの甲子園の成績を総括してみる。

大正期 出場3回
7試合 5勝2敗

昭和戦前期 出場4回
6試合 2勝4敗

昭和戦後期 出場12回
23試合 11勝12敗

平成期 出場1回
3試合 2勝1敗

通算 39試合 20勝19敗

〈後記〉本稿の資料は次の二つである。

週刊朝日 '99甲子園

朝日新聞社 甲子園グラフィ

ティI・II(昭和59年7

月20日発行)

甲子園連続出場に感謝

73期 仲川 信正

倉吉北高最後の打者のバットが空を切った、と同時に、三塁側のアルプススタンドは大歓声に揺れる。勝った、勝った、選手達がベンチから飛び出してホームベース前に整列、校歌斉唱である。勿論、我々も声高らかに「岳南健児一千の……」と歌い上げる。目頭が自然と熱くなる、我を忘れて、しばし幸福感に浸る。

雌伏十二年待ちに待った夏の甲子園大会出場、しかも春夏連続出場である。十九年ぶりの春の選抜出場を果たし、周囲の期待も大きいブレッシャーの中で良くぞ頑張ってくれた。ここに見事に初戦を突破、十七奪三振(うち連続七三振)、全員安打、そして完封のおまけつきである。

我々七三期卒にとって、この甲子園出場は丁度還暦を迎えた年回りに、何よりの贈物を戴いた思いである。馬齢を重ねること六十年、現役を退く者あり、また、第二の人生を模索する最中、青春の熱き

血潮を喚起し、夢を叶えてくれた後輩達に感謝する。

「有難とう。」

さて、高校野球も昨今は社会の時流にそまって、勝てば官軍、手段は選ばず、何でも有りの風潮に毒されている気がする。我が母校静高は、従来どおり文武両道の伝統を高らかに掲げ、王道を堂々と突き進むことこそ、綿々と先輩達から引継いだ血であり、誇りでもある。

今一度、後輩達よ、有難とう。更なる健闘を祈念する、初秋、徒然なるままに。

「あの七回の裏」

甲子園雑感

77期 清水 雅尚

今後しばらくは同窓生の間で話題になり続けるであろう今夏甲子園での対桐生一高戦での七回裏の投手交代を取り上げてみたい。

試合後何人かから電話が来て「何だアレは」というものだった。当然七回裏の投手交代をさしている。私はあの形で予選から勝ち上がった来たんじやないか、負けたからと言って責められないよと言う

にとどめた。しかし新聞記事
を細かく読んでみるだけで七
回にはいくつかの場面が見え
て来ると思う。

あの時監督の頭の中にあつ
たのは、前の試合の継投遅れ
にあつたのは間違いない。甲
府工戦後のテレビインタビュー
で正直に継投遅れを選手に助
けられたと語っている。

しかし選手の側は違つた。
一死二塁、つづく選手は今日
2三振ずつの7、8番である。
高木はランナーが二塁にいて
もこの回は楽に終えると思つ
たに違いない。市川にしても
ここで自分の出番だとは思つ
ていない。試合開始直後から
行なつていたフルベンでのキャ
チボールをこの時点ではして
いない。気持の準備のない市
川は自ら満塁にして動揺、次
打者に死球を与えて同点、次
の斎藤に中前打を打たれて逆
転された。

部外者の私にとってこの時
不可思議な光景を見た。死球
同点の際、監督は再び市川か
ら高木に交代させるべく伝令
に高木のクラブを持たせて送
り出したのにマウンド上での
選手達の話し合いで市川続投

が決まったことである。この
時どんな話し合いがあつたの
か監督・選手達一人ずつに聞
いてみたい思いは残る。

面白いことにこの回死球を
与えた市川が頭の中が真っ白
になつたと言っているが、県
予選でも同じ表現を使ってい
る。県予選決勝でノーヒット
でありながら自らの失策で1
点を失つた時である。

甲子園が始まる前、何人か
で静高の評価を試みた。見
方の厳しいI君は打てないチー
ムがそれほどの上位へは行け
ないと言う。シロウトの私は
うなずく他なかつたがひそか
に考えていた。静高には全国
レベルのピッチャーが2人い
る。県予選で打ちまくつた掛
川西を押さえて勝ち上がった
ではないか。2人のピッチャー
が押さええれば貧打でもそこ
そこ勝ち抜けるのではないか
と。しかし驚くではないか、

貧打の打線が3試合とも2ヶ
タ安打だったのだから。

3回戦の桐生一戦が分か
れ目の試合と見ていた人は多か
つたと思う。桐生一正田投手の
1回戦対比叡山の迫真の投手
戦、2回戦での強打仙台育英

を押さえ込んだ投球を見れば
この試合のむずかしさが分る。
だがよく打つた、正田投手に
10安打も打つたのだから。七
回裏の悔いは残るにしろ、よ
く闘つたというべきだろう。

本大会、静高は8月15日の
第一試合に甲府工と戦ってい
る。本来この試合は前日の第
一試合で行う予定が雨で順延
しかも当日はグラウンド不良
で開始が11時に延びている。
夏の甲子園はご存じのように
終戦記念日8月15日の午前12
時に1時間の黙禱を捧げる。
静高は奇しくもこの場面に遭
遇した。しかもホームベース
の守備位置にいた主将の鈴木
捕手はこの日が自分の誕生日
であつたという。後に何か不
思議さを感じずにはいられな
かつたと言っている。

27年目の甲子園

87期 橋村 芳一

春の選抜大会で1回表の柏
陵の攻撃が終わつたとき思い
浮かんだのは、自分たちが高
三の夏の甲子園のことだつた。
目の前には次々とホームベー
スに戻ってくる高松商の選手
達の姿。終わってみれば16対

0の大敗だつた。今となれば、
その試合を応援に行つたのも
良い思い出ではあるが、1回
に5点取られたときには「ま
たか……」と感じられた。

あの日は団体バスに乗つて
静岡から来たが、現役高校生
という若さもあり、試合内容
とは関係なく盛り上がりつて
いたような記憶があるが、今回
は違う。

仕事仲間に優勝を狙うと大
見得を切つて来たのだから、
緒戦で負けて帰るわけには行
かない。そんな風に思いなが
ら3塁側の内野スタンドから
観戦していた。アルプス応援
席に居ずに内野スタンドに居
るのは訳がある。第一試合
の7回頃から球場の外に並ん
で順番待ちをしていたのだが、
その第一試合(宮崎・日南 vs
京都・峰山)がすばらしい投
手戦で、しかも0-10のまま
延長に入ってしまったので仲
間四人で内野席券を買い一足
お先に、という訳だつた。

こんなことを言つては叱ら
れるかもしれないが、今振り
返ると静岡の試合より、こつ
ちの試合のほうが強烈な印象
が残っている。そのくらい、

優勝候補筆頭の日南を苦しめ
た京都峰山の川原投手は良かつ
た。夏も注目していたのだが
残念ながら地区予選で敗退し
てしまった。それでも恐らく
将来はドラフトに名前が挙が
るのではないかと、自分のひ
そかな楽しみにしている。

さて、静岡である。高木投
手の立ち直りと共に徐々に追
いつき、延長戦で柏陵を下し
たのは誰もが承知している。
翌日のスポーツ紙によると、
1回の柏陵は高木投手のクセ
にベンチが気づき、1塁コー
チャーを通じて打者に球種を
教えていたらしい。そのこと
に静岡側も気づき2回以降は
クセを修正していたらしい。
試合後に静岡側は柏陵の行為
を連盟に抗議したが、逆に両
校に厳重注意という結果にな
つたという記事を読んだ。

最近では盛んにID野球な
どと言われ、分析や戦略が重
要視されているし、そういう
つばぜり合いも見ものにとつ
て楽しいものだから、連盟も
今更高校生らしさにこだわら
ない必要はないのに、変な裁定た
つたと感じる次第であつた。✓

△静岡だより▽

大舞台でご苦労さん!

久しぶりに感動の夏をプレゼントしてくれた野球部の便りである。

二十世紀一〇〇年を守り続けた伝統の集大成として、春夏甲子園連続出場の大快挙は、そのままた十一世紀の後継者たちに大きな励みになること確実である。

だが、春から夏へ向けての課題は山積していた。

春の対日南戦で見た、甲子園での負けパターン——反撃の糸口さえつかめず、ぶざまに終始した試合。野球部全体に漂う安易な雰囲気。そしてチームの求心力の不在。

準々決勝で反対ゾーンのシード校全滅という実力伯仲の県大会。準決勝の対掛川西が、事実上の決勝戦であった。この試合に全精力を注ぎ込んだ高木投手が、七回で疲労困憊、突如の市川救援はスタンドを一驚させる。前年の雪辱を果たした好ゲームだった。

甲子園での戦いぶり。牧野高野連会長の講評にあるよう

に、全国の注目を集めた好試合を展開する。

倉吉北での高木の好投。甲府工の粘りの反撃に耐えた守備陣。優勝投手正田を苦しめた桐生第一との攻防。いずれもそれまで甲子園で見たこともない底力があった。

投手力の安定が、ゲームの流れにリズムを与え、攻守のバランスさえ左右することの証しである。懸念された求心力も、試合ごとに充実して行った。

——。——

その後の話題

高木が全日本のアメリカ遠征の一員に選ばれた。これは、昭和四十八年の植松以来のことである。

通算四回目の国体出場も話題となった。熊本での試合

阿久悠の「新甲子園の詩・21世紀の君たちへ」

対甲府工戦「九回裏

(スポーツ・ニッポン社提供)

は宮崎・都城高に6-0で快勝したもの、高知・尽誠学園に4-0と完封負け。夏から楽しみを与えてくれたチームともお別れである。

ご苦労さん!!
(67期 法月 郁雄)

当然のように新ヒーロー誕生

21世紀の君たちへ

阿久悠の「新甲子園の詩」

対甲府工戦「九回裏」

市川が活躍

高木投手

背番号16の市川が活躍

Sports Nippon

8月16日 (土曜日)

怪腕アビール

142-1回

待しつ、静岡野球部を応援しつづけたと思っています。

切実なお願い

関東支部会長 奥沢 徹

母校創立百二十五年(平成十五年)の記念事業準備のため、本部から関東支部への助成金八十万円が本年度より半額に、つまり四十万円へ減額となりました。

関東支部ではこれまでも経費節約のために幹事会・役員会も会費制とするなど、色々と努力を積み重ねてまいりましたが、この四十万円の減額は大きな痛手です。

皆様の年会費(三千円)の納入の如何に、支部の運営が保っております。最近の年会費納入者数は、会員の約五分の一——ひとりでも多くのご協力を切にお願いいたします。

昭和51年6月に創刊された「静岡・静岡関東同窓会会報」も24年にわたって刊行、今回が48号——ご感想・ご注文などを「振込用紙の通信欄」で忌憚なくお寄せください。

同期会など

五五期

関東五十五期会が長い間会場として使ってきた新宿区荒木町の山宮が廃業したため、今年から新しい会場に移ることになった。

一方、五十五期生も年をとって、会員のなかには、いくら案内をもらってももう出席できない、ないしは出掛けるのが億劫で、もう出席したいとは思っていないという者も少なくないと思われるようになった。

そこで、全会員に対し、「関東五十五期会開催の案内をもらって、当日都合がよければ出席してもよいと考えているので、開催の際は従来どおり案内を送ってほしい」とお考えの方は、ご面倒でも幹事までご連絡願いたいとお願ひしたところ、会員三〇名のうち一〇名の方から開催通知を送ってほしいとの申し出があった。

よって、平成十一年の関東五十五期会を、十月十四日正

午から、新しい会場、東京駅八重洲北口近くの国際観光会館地階の椿山荘八重洲店で開催することとし、前記一〇名の方に開催通知を発送した。その結果、当日は八名の諸君（宗四朗、辻弘、戸塚正五、中田千束、長澤榮一、法月重雄、矢沢六雄、山本孫一）が出席し、いつものとおり十代の昔に還って和やかに歓談。午後二時過ぎ、お互いの健康を祈り、再会を約して散会した。

（法月重雄記）

五六期

平成十一年の関東地区同期会は、十月十八日（月）午後一時から三時間、公務員共済のホテル東京で開かれた。出席者は、青木良文、石塚由雄、大野日佐太、川崎博、北村甫、清水逸郎、戸田榮、西脇光夫、萩原達雄、萩原文平、牧大勝三、松田一郎、山口弘の十三名に、静岡から山田勝也君が参加してくれた。

この一年の間に田中清之君と広瀬慶造君が亡くなられたので、今はなき級友たちのご冥福を祈って黙とうをささげた。

懇談は、萩原達雄君のあいさつと彼の音頭による乾杯で始まった。最初に山田君からこの春静岡で開催された同期会などの近況について報告があった。

今年は何といても母校の野球部が春も夏も甲子園に出て活躍した話で持ち切りだった。それにつけても我等が校歌はすばらしいと一同であらためて確認した。その他の話題も豊富で、三時間はすぐに過ぎ、終りにプロの松田君に記念写真を撮ってもらった。

月曜よりは火曜の方が都合がよいという意見が多かったので、来年は十月二十四日に同じ場所と同じ時刻に開催することを約して散会した。

（清水逸郎記）



六四期

我々六四期の在京生の会合は例年の如く七月七日十八時、J.R.田町駅前「道灌かがり」で開催。本年より新しい世話人になった佐野旭君が司会を務めてくれた。世話人代表の名波倉四郎君は「昭和三十三年以来一度も途断えることなく続いて来たこの会を今後とも

皆で守り続けていこう」と強調。

静岡より参加の桜井一男同窓会副会長が、甲子園出場のお礼と母校創立百二十五周年記念の寄付を是非よろしくと挨拶した。やはり静岡より久方ぶりに上京の漆畑茂君（甲子園で活躍）の乾杯の音頭で開幕した。

渡辺素夫君の入院欠席は淋



しい感ありだが、恒例の近況報告では、鈴木明郎君と吉井駿亮君のスペイン旅行の思い出話に一同笑いこころげた。岩本吉雄君は奥さんの尽力で長時間の手術に成功された由。最後は望月康逸君のタクトで岳南健児を四番まで斉唱し、また来年の再会を誓って散会した。

出席者：浅井幹夫、岩本吉雄、漆畑茂、神谷武男、栗田行雄、佐野旭、桜井一男、桜井富士男、鈴木明郎、竹内豊、塚本光彦、時田勝博、長島健、名波倉四郎、仲野実、永田進一、野沢正憲、長谷川直和、益頭尚文、松下一男、村上喜代一、望月康逸、八木綱三、柳田堯、吉井駿亮、渡辺宏一、26名。

〈付記〉 小生、母校の甲子園出場を一度応援したく八月四日、東京のコンビニにて内野指定席券を購入し、老妻と前夜大阪のホテルに宿泊、翌朝八時二〇分、生まれて始めて甲子園球場に到着、観戦。倉吉北に八対零で快勝。校旗掲揚・校歌を斉唱して、五十年前の出場時に応援に行けなかった心残りを成就することが出来た。(野沢正憲記)

六 四 期 第 30 回 ゴ ル フ 会

十月七日、芳ばしくなかった天気予報が良い方に外れ、若干汗ばむ陽気の中で、例年通り伊豆大仁カントリークラブにて開催。東京・静岡より22名が参加し、和気藹々、楽しくラウンドしました。

最近バワーが落ちたと嘆く多くの仲間を尻目に、

何喰わぬ顔をして飛ばす者、小技に年季の片鱗をみせる者、谷やバンカーにつかまって落胆する者など、様々な中、終始手堅いゴルフに徹し92で廻った時田勝博君が見事優勝、永年の夢を果たす。準優勝は78でベスグロ賞を獲得したもののハンデ差で僅か一打届かなかった渡辺進次君。86でラウンドし二度目の優勝とベスグロを密かに狙っていた蛭川博之君も、渡辺君には「脱帽」の第三位。

奥さん孝行賞「ブービー」の川口君は不調



で、最終ホールで12と彼らしくない大タタキ。病後参加の渡辺宏一君、昔日の華麗さは戻らないが、好プレーで見事カムバック賞。この会の目玉の一つは、優勝・準優勝の楯の素晴らしのほか、ブービー賞のユニークさに有るとも言えます。当会永世幹事野沢正憲君(私が勝手に命名)経営の(株)富士越

提供による「台所用洗剤半年分」。ブービー賞を持ち帰れば、次回以降は奥方が進んでゴルフに送り出してくれる、という勝利物。

パーティーの席上、過去の優勝、準優勝者の一覧が披露され、「〇〇の名前が多いなあ……」「俺は準優勝だけで優勝はネーダヨ……」などなど、過去の戦績と今日の成績を肴に、静岡弁を交えて談笑。

また、幹事役として毎回出席しながら一度も優勝どころか二位もなく、期待された26回大会は一打及ばず三位に留まり楯を手に出せず、今回、病の為無念の欠席となった、縁の下の力持ち岩本吉雄君に第30回を記念して「特別功労賞」の楯を贈ることを満場一致で可決。

稲森照男君の「家族全員の健康」「それなりの経済的背景」「時間的余裕」の三拍子揃って始めてティーインググラウンドに立てるこの幸せをこれからも永く味わえることを願って已まない……、の言葉をしめくりに、来春の小田急西富士ゴルフクラブでの

再会を約して夕暮れの伊豆を後にしました。

参加者は前記六名の他、風間政彦、神谷武男、伊藤剛、井上公司、永田進一、小沢義郎、村上喜代二、漆畑輝夫、野沢正憲、鈴木高保、山本和彦、石原良昭、漆畑茂、塩津博義、佐野旭、大石次男兄(大石先輩は当会発足時よりお力添えを頂いており、3期若返って毎回参加願っています)。それにしても、一度も雨に祟られた事のない、全員の平素の心掛けの良さ(?)と、永世幹事野沢君に今後も引続き面倒をみて頂くことを前提に当会の更なる盛会を願っています。(佐野 旭記)

七〇期

第七〇期のわれわれは、九月二十日東京・京橋「はなの舞」で関東地区在住者の同期会を行いました。

当日は、遠く福島、静岡からも駆けつけた仲間を含め総勢三十二名の参加者で、平成四年以来、七年ぶりの同期会となりました。

北村孝君の司会で始まり、まず先回の同期会以降に物故

された五名（関東地区）の冥福を祈って黙祷をささげました。

そのあと石山博君の開会のあいさつ、一人十五秒の持ち時間でそれぞれの近況報告、中村竜二君の乾杯の音頭に続き宴会に入りました。実に四十五年ぶり（卒業は昭和二十九年）の仲間も数名おり、半世紀前を思いおこしての回顧談・体験談の披露・情報交換など、明日への心の糧を求める青年の情熱を感じさせるものがありました。

また、当日出席できなかった

△静岡だより▽

◎登呂遺跡を再発掘調査

国の特別史跡に指定されている登呂遺跡の、再発掘調査が半世紀ぶりに始まりました。登呂遺跡の調査が初めて行われたのは戦後の昭和二十二年、同窓生の中にも、これに参加するなど思い出をお持ちの方も多いと思います。

今回は、集落の周りに溝があったかどうかを特定することや、住居跡の細かい部分の構造や、集落の構成、住居の

仲間から寄せられた近況報告も、大長智君が「かわら版関東支部」として編集してくれて配布、大へん好評でありました。

アルコールがまわり始めるにつれて話し声は一段とたかく、はじめに着いた席にとどまるものは一人もなく、それぞれがそれぞれの思い出を求めて話し合い、笑い合い、予定していた時間はあつという間に過ぎてしまいました。

女性の参加者が皆無であったことは少々淋しい感はありませんが、皆元気で張り切った

周りの立地、自然環境、水田跡の小区画の有無などについての調査が行われます。

静岡市教育委員会が、再整備に向けて五カ年計画で行うものですが、新たな発見に期待が寄せられています。

◎二〇〇一年に

世界お茶まつり

静岡県では、二〇〇一年一月に、静岡市内のグランシップとツインメッセ静岡を主会場に「世界お茶まつり」を計画しています。

先頃、開かれたフォーラム

ており、ライフワークへの取り組み・ボランティア活動への参加等々、今からまだまだやりたいことがいっぱいといった感じでたいへん頼もしく、岳南健児ここにありの気迫を感じました。

来年は六十五歳、二十世紀最後の年ですからまた集ろうとの申し合せをし、そのあと、高らかに、岳南健児一千の……を歌い、味岡宏君の閉会のあいさつで無事終了し、名残りを惜しみながら三々五々散会いたしました。

（大高源之丞記）

in静岡で、石川県知事から概要の説明がありました。『世界緑茶協会（仮称）』の設立も考えているとのことでした。

世界お茶まつりのメイン事業は茶産業界国際見本市、国際OCH A学術会議、世界茶美術工芸展などによって産業技術、学術研究、文化創造の三分野の振興を図ることがあげられ、会期中には、海外十五カ国を含め、五十万人の参加を見込むということです。

（67期 光木 徹）

七七期

今年4回の東京静岡対抗戦

人生の3コーナーをすぎ4コーナーに差しかかるうとしている77期の集まりがさかんになっております。

昨年本部での同窓会総会で当番幹事をつとめ、百数十名の同期生が出席して以来何かにつけ集合している状況です。

ゴルフもそれぞれの集りがある以外、今年東京静岡対抗戦と称して1月9日菊川カントリーに16名、4月17日同じく菊川カントリーに16名、6月1日川崎国際生田緑地ゴルフ場に14名、8月26日太平洋クラブ御殿場コースに23名参加（写真）と盛会となっております。

10月11日には東京だけで前泊しながら同期の栗野君が社長をしているNKK系列のバイロンネルソソカンントリークラブ（02461561822）でプレーを堪能して来ました。



福島県いわき市と距離的には少し遠方ですが、充分な配慮をしてくれます。ご希望があれば77期清水までご連絡下さい。

（清水雅尚記）

第52回江の島会

平成11年9月5日、恵比寿屋旅館で開催され、岳南健児女57名が集まった。

今年は母校野球部が春夏連続して甲子園に出場の快挙を成し遂げたとあって、総会前から懇親会にかけて、野球の話で燃え上がっていた。勝利の後、甲子園で歌った校歌に感激し涙が出てきてしかたがなかったなどと、話す会話があちこちから聞こえていた。

会はず奥沢徹氏(59期)の司会で始まった。川村春雄同窓会長(46期)は「甲子園では学校、監督、選手が一丸となつて戦った。また、後方支援をしていただいた同窓会の皆さんがたの協力に感謝申し上げる。校歌にある文武の道を歩んでいるといえる。さらに、百二十五周年記念の準備も着々と進んでいるので、併せて協力、応援をお願いしたい」と挨拶された。

野崎耕一校長は「赴任早々甲子園の応援ができて嬉しかった。母校の近況だが、今年は近年になく進学率が高かった。また、野球ばかりでなく、郷

土研究、囲碁、陸上、テニス等クラブ活動も全国レベルの活動を行なっている」と母校の様子を話された。

藤山昌弘野球部副部長(81期)から甲子園までの練習経過、大会期間中の指導内容等詳細な説明と、新チームの状況の説明があり、「来年も皆さんが期待できるチームに鍛えて行きたい」と話をされた。総会は事業報告、会計報告、監査報告が全員一致で承認された。その後、初めて参加された人達の自己紹介があつて、総会を終了した。

懇親会は黒田秀幸氏(67期)の司会で始まり、山梨由記氏(73期)の指揮で校歌を四番まで高らかに歌った。

今年白寿を迎えられた永野清名誉会長(35期)の音頭で乾杯をし、宴会が始まった。最後に逍遙歌を歌って一次会がお開きになった。しかし、江の島会の特徴は、橋のたもとの屋台「いそみ」での沈む夕日を眺めながらの歓談である。名残りはつきなかつたが、来年の再会を約して江の島に別れを告げた。

(68期 雨宮明生)

Ⅱ 各期幹事一覧Ⅱ

幹事が変更の場合は事務局までお知らせください。特に幹事未定の期は至急選出してください。

43 西沢純三	44 高橋真一	45 鈴木弥門	46 田附敏三	47 杉山栄一	48 原崎進一	49 菅沼 栄	50 杉本久敬	51 丸尾文治	52 佐伯正剛	53 服部雅雄	54 廣川 聡	55 月見里得知郎	56 安東哲夫	57 相川富士雄	58 法月重雄	59 清水逸郎	60 萩原達雄	61 岩井平一郎	62 影島利邦	63 青木静男	64 原 淳	65 上杉重吉	66 堤 崇	67 山本雅之助	68 大石次男	69 木下景一	70 野沢正憲	71 渡辺素夫	72 田中俊男	73 朝比奈正三	74 小杉 弘	75 鈴木 鈴	76 木敏行	77 高橋俊見	78 荒谷じつ子	79 吉 吉	80 崎英輔	81 雨宮明生	82 宮崎吉英	83 山本龍男	84 大高源之丞	85 大長 智	86 児玉文男	87 後藤弘枝	88 海野 彰	89 幸雄	90 篠原 直	91 浦田 均	92 山本博司	93 山梨由記	94 佐藤鐘司	95 藤原経史	96 後藤正義	97 酒井孝太郎	98 鈴木 浩	99 野方重人	100 三浦位通	101 清水 雅尚	102 鈴木藤男	103 上田尚亮	104 吉野卓史	105 鈴木素明	106 萩原英昭	107 堀内淳司	108 山本雅敏	109 浅川祥子	110 池田幸司	111 深津俊郎	112 成岡和美	113 井出慎吾	114 薬科名雄	115 石川嘉和	116 高橋 宏	117 鳥巢 修	118 新村暢宏	119 荒井千明	120 村松秀明	121 山野直文	122 岡村幸彦	123 大羽章弘	124 松野敦子	125 奥田規之	126 細沢 優	127 藤森 尚	128 小泉輝武	129 小泉輝武
---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	-----------	---------	----------	---------	---------	---------	----------	---------	---------	--------	---------	--------	----------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	---------	---------	--------	---------	----------	--------	--------	---------	---------	---------	----------	---------	---------	---------	---------	-------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	----------	---------	---------	----------	-----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------	----------

◎各期幹事のご活躍と、より一層のご協力を期待！

その後の同窓会活動

(平成11年5月～11月)

◆会報47号出来、郵送

5月28日(金)

◆役員会・幹事会

6月11日(金)

29名が集まり総会の準備、諸報告につき意見交換など。

◆第19回印高会ゴルフ会

6月18日(金)

箱根カントリー倶楽部参加者：18名

優勝：奥沢 徹(59期)

2位：富田駿介(76期)

3位：石間啓一(77期)

◆役員会

6月21日(金)

10名集まり総会の準備の確認など諸作業。

◆第25回関東同窓会総会

6月25日(金)〈別掲〉

◆役員会

8月10日(火) 新宿「北海道」8名集まり、総会報告・反省、新体制の運営などにつき協議。

◆平成11年度総会・懇親会

11月13日(土)

ホテルアソシア静岡タミナル

奥沢会長出席。

回想・随感など

静中から旅順工大へ

43期 西沢 純三

静岡中学校から旅順工科大学に入学した者は六名であった。41期卒業の岩川完先輩が初めて入学されている。私が入学した時には予科の興亜寮の近くの学部寮の翠明寮に居られたので時々お尋ねしている。

静中では弓道をしてもらったので旅順でも弓道部に入っておられた。機械科を卒業されて昭和八年四月鞍山の昭和製鋼所に勤務されていた。私が卒業旅行で昭和十一年三月奉天、新京、哈爾濱へ行った帰途、鞍山にお邪魔して工場を見学させていただいた。

終戦後無事引揚げられて故郷の清水市で、清水電解工業所を経営されていた。残念ながら昭和四十七年二月十日他界されてしまった。

43期の村松信君は昭和三年四月入学し、昭和十年三月機械科を卒業されて満洲炭硯株式会社に入社され、西安炭硯



↑旅順工科大学本館（明治43年～昭和20年）、現在は中国海軍病院。

所に勤務されていた。

戦後に引揚げられて北九州の小倉炭硯株式会社勤務され、私が同地に出張した際に時々お会いしていた。定年後は会社を経営されていたが、昭和六十二年六月十一日に逝去された。在学中は弓道部と

霊南乗馬会に入っておられた。静中53期の渥美久三郎君は旅順に入学したが終戦下の二

十年上期繰上卒業となった。

当時東大と旅順にしか無かった航空学科を卒業したが若くして他界されてしまった。

静中56期の榎松（仲野）英吉君は二十一年下期冶金科卒業で終戦時最後の卒業生だ。引揚後は静岡市役所に勤務された。水道部長、総務部長を歴任された。現在、静岡で自適の生活をされている。

静中58期の田中誠一君は終戦時には学生であった。引揚げ後、京大冶金科を卒業されて、東洋鋼板株式会社勤務された。現在は山口県下松市に在住されている。

静岡県内の各中学校からも旅順工科大学に進学されていた。現在は静岡県人会として浜松在住の中村徹・木俣清次郎両君が幹旋をされ、会合を開いて旧交を暖めている。去る平成十一年五月十二日、伊豆長岡温泉静雲荘で夫人を含めて十二名が集り楽しい一夜を過ごすことができた。

平成十二年五月十日、旅順工科大学創立九拾周年大会を東京で開催する予定である。昭和二十年四月一日付の発令で翌二十一年四月一日には旅順帝国大学が発足する筈であった。しかし、幻の大学となってしまった。

あらためてここに、岩川完村松信、渥美久三郎三氏の御冥福を祈る。残った我々としては静岡中学・高校の二十一世紀へ向つての益々の御発展を祈る。

静岡の万葉を歩く

（その十九）

51期 原崎 郁平

藤枝市志太四丁目の金比羅神社公園内に万葉歌碑が建っている。

志太の浦を 朝漕ぐ舟は
よしなしに こぐらめかもよ
よしこさるらめ

（巻十四・三四三〇）

昭和五十三年十月建碑

桜井 淑 書（歌人）

大きさは高さ百十センチメートル、幅二百センチメートルの自然石である。

を過ごすことができた。

平成十二年五月十日、旅順工科大学創立九拾周年大会を東京で開催する予定である。

昭和二十年四月一日付の発令で翌二十一年四月一日には旅順帝国大学が発足する筈であった。しかし、幻の大学となってしまった。

あらためてここに、岩川完村松信、渥美久三郎三氏の御冥福を祈る。残った我々としては静岡中学・高校の二十一世紀へ向つての益々の御発展を祈る。

歌の大意は「志太の浦を朝漕ぐ舟は 何の理由もないのに 漕いでいるんだらうか、きつとそのわけがあるにちがいない」である。

この歌碑に行くには、JR藤枝駅北口を背に国道一号線を横断して、しばらく行くと瀬戸川に出る。その川沿いに上流に約六百米行くと左手にこんもり茂った小山が見える。これが金比羅神社公園で、頂上まで百数十段の石段とゆつたりした歩道が設置されている。頂上には金比羅神社と亀田稲荷が並んでいる。万葉歌

碑は金比羅神社に登る石段下、椿の花咲く植え込みの前にある。

横に広い白っぽい石に黒磨石を嵌め込み、歌は薄青く刻印されている。副碑として碑裏には次のように書かれている。「右の歌は万葉集第十四巻に出てくる東歌で、この地志太の地名がよみこまれた唯一のものである。歌はここに住む若者の恋をさりげなくうたい挙げた清新の氣に富んだものである。若山牧水門創作静岡支社及び万葉・源氏の研究者約七十名が発起し、この歌碑を建立した。」この丘は



昔から瀬戸川や藤枝市や志太郡の町を見守っている。

万葉の舞台となったのは大井川の河口付近と思われる。遠江と駿河とは、大井川を境とするが、志太郡は大井川の東岸で、現在の海岸線よりかなり内陸に寄ったところであった。志太という地名は藤枝市にあり、大井川の河口の東側に位置する大井川町は、大井川の河口の三角州がほぼその全域であると考えられるが、この大井川町が志太の浦であったと推定される。

歴史は数々の生活をそのまま見守って形成されていく。

幾度の川の氾濫はその地名を消滅させることもできる。歌にあるように、意味あり氣に漕ぐ舟の風情は、読む人の心にさまざまな空想を呼び起こしてくれる。ほのかな風に吹かれ、この丘に立って周辺の景色を眺める時、先人達の生活が思い起こされる。

金比羅神社の近くに「志太郡衙跡」がある。奈良・平安時代には、国には国司、郡には郡司、里には里長がいるという関係から、ここ

には官僚郡司が配置された。当時は人口は一里約千人前後というから、八里の志太郡は約一万人程の人口である。そして土着の豪族から選ばれた郡司は、終身その任に就くことになる。この地域では、駿

河国の出張所的扱いがなされておき、駿河・志太の往来は盛んであったと思われる。藤枝市に隣接した岡部町には、木像で有名な木喰（もくじき）上人の作品が安置されている常楽院、梅林院、光泰寺がある。

ゴルフ雑感

66期 藤原 隆二

ゴルフを始めて三十八年目になる。ちょうど三十歳の時に始めたことになる。

当時ゴルフは今ほど大衆化しておらず、どちらかといえば「金のかかる年寄りのお遊び」といったイメージの強いスポーツだった。だからといって私が金持ちだった訳ではないし年寄りだった訳でもない。たまたまその当時の会社の上司にゴルフ好きの人がいて誘われたのがそもその始まりだった。あの頃はテニスに熱

中して、それ程熱心に練習などしなかった。金もないので道具は上司の払い下げのハーフセット。幸い会社と関係あるゴルフコースがあつて、社員はメンバー扱いでプレーができた。

ゴルフにまつわる思い出は色々あるが、いわゆる「筆下ろし」で出かけた某カントリークラブが休日だったのに宿直の方にお願ひしてセルフバッグでやったこと。

海外のコースでは何といつてもあのセントアンドリュース・オールドコース、十四年前の五月雨模様でスコットランドらしい天候のなか、早朝六時半スタート、一人ずつ専属キャディーをつけた贅沢なラウンド。しかしこの専属キャディーのお陰で、オールドコース特有の無数の蛸壺バンカーを避けることが出来、89でラウンドできた。17番ホールでは当時全盛時代のトミー中島がトリプルボギーを叩いたことが有名で、ここをボギーで上がってキャディーに誉められた。

キャディーといえはタイのバンコクで一人に三人ずつ、

フォアキャディー二人を入れ一組合計十四人のキャディーを引き連れた「殿様ゴルフ」を思い出す。バッグ担ぎのほか傘持ちと椅子持ちの三人という訳だ。

ゴルフには「ゴルフウイドウ」なるものが付き物である。旦那がゴルフに夢中で奥方を寂しがらせる。最近女性ゴルフファームも多く、こんな言葉も死語となりつつある。この「ゴルフウイドウ」では面白い話がある。ゴルフ発祥の地はご存じのとおりイギリス、そしてゴルフはイギリス紳士のスポーツといわれている。どこかの国でつい最近大騒ぎになったように、大抵のカントリークラブなる所では女人禁制の所が多いそう。

山の神を恐れるイギリス紳士たちが自分たちだけの憩いの場所としてカントリークラブを造り、一日ゴルフに興じ酒のみ大いに語ったという。つまりこの場合の「山の神」なる奥方が「ゴルフウイドウ」となる。しかし、そうだとすると果たして「ゴルフウイドウ」は寂しがっているだろうか。

『芸・話・人』と山川静夫の仕事

67期 朝倉 勇

このところ、興味と関心を抱いていることがある。それは「職人」だ。職人の存在と仕事に惹かれているのである。どこの国にも国宝や重要な文化財がある。遠いむかしにつくられ、時代を表象しながらいまも息づき語りかけてくるそれらはいとおしく、心を打つ。そのすべては、思えば「職人」の仕事なのである。

古代エジプトやギリシア、ローマ、中国、インドなどに始まり、中世・封建時代を経て近代に至る時代時代の証人たち。それらすべての有形・無形の文化財は職人がつくったものだ。

この六月に妻とイタリアを訪ねた。そこには古代ローマが厳然と在り、連綿とつづいたキリスト教と都市国家が在り、そして現代生活はまさにその文化文明の上に乘っている。二重三重の、重層構造社会であった。そして各々の時代の粋を示す造形物。それらイタリアが誇る文化・芸術は、職人たちの意匠であり腕がつ

くった細工だ。そして何よりも職人たちの心意気の所産だ。僕たちはその思いと仕事の確かさ、見事に感じ入るのである。

なにもイタリアに限らない。あの法隆寺や薬師寺にしても、京都御所、桂離宮、そして正倉院の御物のかずかず、みんな職人たちの仕事ではないか。大阪城、白鷺城、江戸城もあり。権力者は金を持ち、造作を命じはする。しかし頭脳を使つて設計し、手を使つてこしらえるのは職人たちだ。創造者は職人なのだ。ミケランジェロもダビンチも職人であった。

心に響く「いい仕事」があるものであつて、はじめから「芸術」なんてものはありはしなかった。職人たちの技と芸が、文化をつくったのである。粋な心が「みごと」をつくるのだ。

そのことを忘れて、僕たちは芸術だとか創造だとか文化などと、解つたようなことを言つたり聞いたりしている。

ナンセンスのことが多い。とくに政治家という人種にはこの手が多いようだ。

さて、ここに山川静夫という人物がいる。彼は（たまたま僕は同期生なのだが）、この「職人」の世界に早くから関心と愛着を持ち続けてきた（と思う）。とくに舞台で芸を披露する職人について、驚くほどの情熱をもつてその芸の紹介につとめている（芸の人を職人というのは適當でないかもしれない。が、その本質は似ているのではなからうか。山川静夫君はNHKを退職



「滝の白糸」を演じる山田五十鈴と山川静夫（平成10年7月6日）

後、テレビでは見せきれない芸の本質を見せようと前代未聞の計画を立てた。それが三越劇場で評判の「山川静夫名人劇場『芸・話・人』」という催しだ。平成六年五月に始まったこの会が、今年七月にめでたく三十回を迎えた。九月には三十一回として寶山左衛門（人間国宝・笛方名人）と渡辺貞夫（世界的なアルトサキソフォン奏者）のジョイント演奏という、曲芸的な舞台を創つてくれた。

和の竹笛と金管楽器のサックス、その演奏対話を即興で聴く。演奏者自身もどんな展開・結末になるかわからないという、ドキドキする即興曲が劇場を包んだのであった。

いま、「つくる」に創という字を当てたが、こういうことがほんとうの創造なのではないか。その時を失えば、もう伝えることができなくなってしまう芸という醍醐味を、舞台の上に生身の本人を紹介して見せながら聴かせるのだ。山川静夫という人の心意気に共感した人だけが、「芸本番」



三越劇場楽屋で談笑する森繁久彌と山川静夫（平成10年9月28日）

ともいえる粋な技や演奏、そして秘話を惜しげもなく披露する。芸の人をその心境に誘い込んでいく、そのこと自体が高度な芸である。彼の人柄と教養がそうさせるのだ。

別表の舞台・三十回をご覧いただきたい。その顔ぶれの多様さ。最初に息を呑んだのは森進一の歌と吉田蓑助（文楽）の操る人形の競演だった。そうかと思うと島倉千代子の思いのほかのあつげらかとウィット、公的な場に出にくかった勝新太郎（今は故人）の絶妙な語りと風格、山田五

山川静夫名人劇場 ～芸・話・人～ ご出演いただいた方々

第1回	堺 正章・羽田 健太郎・立川 志の輔
第2回	森 進一・木村 好夫・吉田 義助(人間国宝・文楽)
第3回	谷村 新司・長山 藍子
第4回	宮川 泰・羽田 健太郎・中島 啓江
第5回	宇崎 竜童・春風亭 小朝
第6回	雪村 いづみ・団 しん也・寶 山左衛門(人間国宝・笛方)
第7回	勝 新太郎・デュークエイセス・内海 桂子・好江
第8回	立川 談志・前川 清・弦 哲也
第9回	美川 憲一・林家 木久蔵・井上 堯之・坂東 秀調
第10回	ダークダックス・伊奈 かつべい・望月 太左之助 ほか歌舞伎鳴物連中
第11回	さだ まさし・市川 団蔵
第12回	古今亭 志ん朝・新沼 謙治
第13回	浅香 光代・今 陽子・蘭田憲一とデキシークィングス
第14回	島倉 千代子・入船亭 扇橋・アントニオ古賀
第15回	春風亭 小朝・市川 右太衛門・中西 俊博(バイオリン)
第16回	橋 幸夫・三遊亭 圓歌・小林 靖宏(アコーディオン)
第17回	森 光子・堺 正章・世良 譲
第18回	石川 さゆり・桂 歌丸・杵屋 直吉・田中 佐幸・稀音家 祐介 ほか長唄囃子連中
第19回	池畑 慎之介(ピーター・吉村雄秀)・吉村 雄輝(人間国宝・地唄舞吉村流家元)・小林 カツ代 富山 清隆(地唄争曲家)・藤舎 呂浩(囃子方)・結城 久(ピアノ)ほか
第20回	島田 正吾・市村 正親・上柴 はじめ(ピアノ)
第21回	桂 米朝(人間国宝)・豊竹 咲太夫・峰 さを理・波木井 正夫(京都・ぎをん「波木井」主人) 竹澤 宗助(三味線)・丸尾 めぐみ(アコーディオン)・吉田 さとる(キーボード)
第22回	三波 春夫・三遊亭 鳳楽・澤登 翠(活動弁士)・兼子 勲(指揮・キーボード)ほか
第23回	中村 又五郎(人間国宝)・春風亭 小朝・国立劇場第14期歌舞伎俳優研修生 竹本 六太夫(浄瑠璃)・豊澤 長一郎(三味線)
第24回	野村 萬斎・立川 志の輔・野村 万作(特別ゲスト)
第25回	山田 五十鈴・波木井 正夫(京都・ぎをん「波木井」主人)・中村 歌江
第26回	森繁 久彌・加藤 道子・ボニージャックス
第27回	中村 勘九郎・古今亭 志ん朝・春日 栄芝・竹本 清太夫(浄瑠璃)・鶴澤 長一郎(三味線)
第28回	黒柳 徹子・猿若 清方(猿若流流祖)・神田 福丸(端唄・俗曲)・河原 忠之(ピアノ) 豊 藤美(三味線)
第29回	中村 橋之助・柳家 小三治・山藤 章二・森本 規子(三味線)
第30回	中村 富士郎(人間国宝)・三遊亭 圓歌・中村 勘太郎・豊竹 咲太夫(監修)

十鈴の年齢を超越した妖艶、森繁久彌の真偽の境をいくとばけた味、NHK大河ドラマ「元禄繚乱」直前の中村勘九郎の歌舞伎演技・実演解説：などなど。

とくに、一般人がかいま見ることのできない歌舞伎など日本の伝統芸能世界の楽屋裏を実演して解説するなどは、山川静夫君だけが舞台化できた画期的なものであろう。毎回、「芸のみごと」を楽しみ笑いながら、庶民の芸の心が反権力的であつたからこそ、活きのよさと粋の世界をつくれたのではなかったかと思つたりもするのである。

そして、デジタルという怪物が世界中を制御する二十一世紀に、もつともアナログである生身の人間の肉体と心がつくる仕事「芸」を大切にしないと、地球は危いことになるだろうと危惧する。僕流に言えば、いまこそ手のぬくもりを活かす職人と心意気が重要であり、価値をもつのではないだろうか。

山川静夫という人物は現代の粋を生きた男であり、創造という仕事を市民レベルで見

せてくれる芸の人なのだと思う。こんないい仕事ができるなんて、幸せなやつだ。

(一九九九年十月六日)

◎なお、山川静夫名人劇場「芸・話・人」へのお問い合わせは、三越劇場(電話〇三・三二七四・八六七五)にどうぞ。

由比の桜えび

73期 深澤 靖男

旧東海道の宿場町として栄えた由比町一帯は東海一の景勝地と謳われ、子供のころ由比の浜から眺めた富士山や駿河湾の雄大で荘厳な景色は今でも脳に焼き付いて離れない。静岡生まれの私にとっては、よく父親につれられて由比の浜へ新鮮な魚や貝などを食べに行った日のことが憶い出される。

由比と言えば、桜えび……それは鰯の稚魚である「しらす」と共に駿河湾に生息する自然が与えてくれた貴重な恵みと言えよう。特に由比海岸一帯は、春と秋の解禁期ともなると水揚げされた桜えびの天日干しで辺り一面、朱一色に染まり壮観である。

駿河湾には、狩野川、富士川、興津川、安倍川、大井川など、大きな川の水が流れ込み、桜えびの餌となるプランクトンが豊富に繁殖する上、水深があることから光を嫌って、昼間は深海に生息し夜だけ餌を食べに浮上する桜えびにとつては格好の住み処となっている。

桜えび漁には、4月～6月にかけての「春漁」と10月～12月にかけての「秋漁」がある。桜えびは夏の産卵期を過ぎるとその一生を終わる。従って春に獲れるものは産卵をひかえた親エビ、秋に獲れるものは子エビということになる。一般的には小ぶりではあるが身が柔らかく瑞々しい「秋えび」の方が美味であるといわれている。そうは言っても春漁で獲れるのは秋漁で獲れるものより大きい親えび、これまた頗る旨い。

その桜えび漁は偶然から始まった。ものの本によれば今から一〇〇年前、明治の中頃、由比に住む二人の漁師が漁にでた際「かんだ」を忘れてしまい、仕方なく海中深く網を沈ませたところ大量の桜えび

が掛かっていたことから始まったという。それ以来絶えることなく漁は続き、桜えびといえは駿河湾、中でも「由比の浜」が有名となっている。さて桜えびを味わうと言う

ことになるがやはり美しい「生えび」が一番だろう。ブツチンとはじける歯触りとほのかな甘味が口中一杯に広がる。生は獲れたてを産地由比で食するにかぎる。その他、桜えびをふんだんに使ったカリッと揚げた「かき揚げ」の味と香り、サツとゆがいた「釜揚げ」、サツパリとした「酢の物」など、食べ方にも色々あるが、なんといっても

地酒で一杯やりながらの桜えびが一番。この上ない至福を感じるときだ。酔い納めには、あつさり味の「桜えびの釜めし」で締めくくるとしよう。余談だが、漁師たちが漁を終り沖からあがって、一杯やりながら獲れたてを賞味したという「沖あがり」という地元ならではの食べ方がある。予約すれば現地に食べられると言いがまだその機会がない。

現地由比では「桜えび館」にて新鮮な桜えびが食べられるが、昔から「倉沢屋」や「井筒屋」「割烹西山」などでも美味しく戴くことができる。また最近では、割烹「玉鉾」で桜えびのフルコースが人気となっている。

由比と言えば、江戸時代初期の兵学者「由比正雪」の出身地としても有名である。由比の街に今も残る「御染め物所正雪紺屋」が正雪の生家であると云い伝えられている。正雪生家の向かい側には「東海道広重美術館」があり、広重の浮世絵版画が数多く展示されている。「桜えび」と共に価値ある美術館である。

このように駿河湾で揚がる由比の「桜えび」は、この辺で獲れる「しらす」と共にいつも変わらない味と香りを保ち、昔の面影をそのまま残す街道の美しい情景と共に観光客の人気を集めている。

最近しばしば由比を訪れる機会があり懐かしさのあまり、桜えびのことを書き記したが、考えてみれば由比・蒲原方面ご出身の諸兄姉が大勢いらつしやることを思い汗顔のいたり、どうぞ皆様方のご叱正を願うや切なるものがあります。

『モダン・アレルギー』 荒井千明氏（90期）の 最新作を読んで

87期 石川 嘉和

今年になって脳死判定に基づく臓器移植が法施行後初めて行われ、医療の世界の情報に接する機会が増えてきた。

また、もうおなじみの花粉症をはじめシックハウス症候群やら環境ホルモンの問題など我々を取り巻く環境が、人体に与える影響を危機感を持って身近に感じる時代となってきた。

荒井千明氏は新潟大学医学部を卒業、病院勤務後、東大医学部大学院を終了され、現在、日清紡付属診療所長、医学博士である。

その荒井氏の最新作『モダン・アレルギー』（集英社文庫）はそんな現代に生きる我々が抱く漠然とした疑問に答えられる、ある意味でタイムリーな著作である。

この本は免疫システムとアレルギーについて書かれたものである。

荒井氏は、免疫システムの網の目のように入り組んだディ

テールの数々を語る。それらの細部は建築設計の詳細図のようにこまかいが、ひとつひとつの部分は結局全体との関連を必ず持っている。そうした部分と全体との関わりを、読者と一緒になって行きつ戻りつしながら著者は説明していく。

今まで知らなかったような事柄が次々と提示され、内容は新鮮な驚きに満ちている。

例えば、抗体というものが体内に異物が混入すると、それに対抗して作られるものと思っていたが、実は異物の混入するしないに関わらず体内に既に存在していて、異物に備えている。そしてその種類は千万種もあり、しかも抗体を供給したりする細胞は、人体保全の目的で、ある条件下で自殺（アポトーシス）するように仕組まれているという。

このように細かい所でリンクしていて、精密で動的な免疫システムに、今までに無い新しい化学物質が入ってくると様々な新しいアレルギー病が起こってくる。今はまだ限られた人の問題であるが、近い

将来多くの人間に共通の問題になっていく可能性があると思われる者は警告する。

前作『医者者の責任 患者の責任』（集英社文庫）は、フィクショナルな体裁で、医療の立場から現代を捉えたエッセーであったが、今回は一転して自然科学分野の新書のような内容で、結果として現代を浮き彫りにしている。意欲的な作品であり、是非一読を。

日本の国際貢献の一側面

91期 村松 秀明

同窓会員の皆様にはあまり関係がないことから関心を持たれていないと思われる話題について敢えて私見を一言。それは東ティモールへの国際軍（多国籍軍）の派遣に際して起こった日本（自衛隊）の人的貢献についての議論である。

当初、多国籍軍に自衛隊の部隊を参加させようという議論があったが、これは憲法に抵触する恐れがある上、根拠となるであろう一つの法律（PKO法、国際緊急援助隊法）も適用できる状況にないことから沙汰止みとなった。

次に浮上してきたのが、東ティモールの情勢安定後に派遣が予想される国連平和維持隊（UNPKO）に対する自衛隊の部隊派遣である。これをしなければ日本のインドネシアに対するこれまでの貢献が無に帰すばかりでなく、国際社会から国力に応じた貢献をしていないと非難され、発言力を失うという議論である。

政府の冷静（？）な対応の一方で、一部の政治家・識者・マスコミはPKO法で規定されながら付則で凍結されたPKF（平和維持隊）本体業務を速やかに解除し、歩兵部隊を派遣すべきであると主張した。

では、なぜPKF本体業務が凍結されたかと言えば、PKO法制定当時（H四・六）、同業務（歩兵部隊）の実態が十分解明されておらず、憲法の禁じた「武力の行使」に当たる場合全くないとは言いがたくなかったためであると聞いている。

平成四年九月、カンボジアに部隊等を派遣して以来PKOの実績を積み上げてきたところではあるが、凍結されてきた業務を次期国会で単純に

解除して良いかといえば、個人的にはそうではないと考える。解除するためには、まず条件を整えることが必要である。それは①PKO法に規定された正当防衛・緊急避難などの場合に限定された武器使用の条項を、国連が規定する「自衛」（任務遂行のための使用を含む）の範囲に拡大して他の派遣国並にするとともに、

②実施業務に歩兵部隊の一般的な業務である「警護」を付加することが必要不可欠である。さもなければ、日本の自衛隊で構成する歩兵部隊は半人前の状態に留まり、現地で国連や他の派遣国部隊から信用されないばかりか、派遣隊員は必要な行動をとれないことから危機に直面した際、思わぬ犠牲を生じる恐れがある。

新聞の記事などを見ると、まず部隊派遣ありきでPKF本体業務の凍結解除は既成事実のように扱われているが、付け焼き刃のように場当たり的に部隊を派遣すれば必ずや将来に禍根を残すことになる

と考える。ここは、政府も腰を据えて、派遣された隊員たちが安心

追 悼

宮澤次郎初代会長を悼む

59期 奥澤 徹

私が初めて宮澤先輩にお会いしたのは、昭和46年3月に開催された同窓会東京大会でした。次は昭和50年6月東京会館での関東支部の結成総会に於いて初代会長に就任された時でした。



7月3日逝去

その後私は関東支部の59期の幹事として、会合に出席する都度、会長と直接お話しする機会が多くなりました。

会長の同窓会への情熱は素晴らしいと思ったのは、言葉の中に「同窓会は会員の心のふるさとであり、憩いの場であり、友情を温める集いであり、年齢を忘れ、仕事を離れ、いつまでも中学生（高校生）でいられる、心から楽しい会でありたい」と言われた

ことであります。

それはサミュエル・ウルマンの「青春の詩」の通り、常に理想と情熱に燃え、「青春の会」を組織し、自ら会長として長い間私共に「心の青春」の大切さを訴え続けたことに通ずるものと思います。

私は先輩が会長を辞せられた時に、直接その立派な「青春の詩」の額を記念に戴き、以来私の本社社長室に掲げております。

また先輩は静岡中学、旧制

奥野孝君を悼む

53期 月見里得知郎

予て病氣療養中であった前副会長奥野孝君（53期）は本年七月逝去された。残念と言いか悲痛と言いか、悼んでも悼み切れないものがある。



7月27日逝去

君は幼少の頃から美的感覚に秀で、書き方図画手工等で先生達を驚かせたものであつ

静高、東大と剣道部で活躍され五段の腕前で、弓道も四段だったそうで、まさしく文武の道をきわめられた立派な岳南健児であられました。私も会長として先輩の築きあげた関東支部を若い世代の同窓生諸君と一緒に頑張って健全な立派な同窓会にするよう努力する所存であります。

ここに生前のご厚誼に對し深く感謝申し上げ、心からご冥福をお祈り申し上げます。

た。小学校高学年から中学時代は模型飛行機に凝り、進学についても航空工学を志望するのだが、家永先生の指導に従って日本大学建築科に進んだ。

この素直さが君の人生を好運に導いたとも言えようか。我々の時代は卒業に次いで兵役となるのだが、君は工兵の幹部候補生から将校に任官、陸軍予備士官学校教官を命ぜられ内地勤務で終戦を迎えた。

戦後復興期の建築設計事業に於ける活躍は、皆さん御存知の通りである。

また君は頼まれたら断われない性分で、当時あまり振る

わなかった静中野球部で一塁手として練習に精を出していたし、今から二十五年余以前の関東同窓会創立の時でも、鈴木与平会長の発想には関係者一同賛成なのだが、同窓会本部の仕事量を考えると関東支部を引受けようという人は居なかった。ここで奥野君が世話人中で最も若い我々がやるしかないと言うので筆者とのチームワークで引受ける事とし、幸い奥野君の会社「大雄」に山田政光さんという事務能力抜群の人が居たのでその力を借りて事務局を運営し、関東支部の今日の基礎を築いたのである。

今、君を送るに当って、御家庭にも事業にも後顧の憂いは無いとお察しする所、何卒安らかに眠り下さいと念ずるのみである。

追 憶 の 記

43期 西沢 純三

平成十年九月二十四日静岡三笑亭で四三会の米寿記念第百回のクラス会を開いた。会員の出席者十名、御夫人五名で楽しい会合であった（会報46号のp.7に既報）。

無事昭和の激動期を乗り越

して任務を遂行できる態勢を整えてもらいたいとカンボジアでのPKO（UNTAC）派遣経験者の一人として切に願うものである。

ひとりひとりのご協力を！

。総会や同期会などの会合には億劫がらずに出席し、楽しい一刻を持ちましょう。

年会費の拠出者が年を追って減少し、さびしいことです。関東同窓会の運営も難しくなってきました。

◎事務局より

関東同窓会の円滑な運営のため平成11年度年会費（三千円）の納入をよろしくお願いいたします。

同封の振込用紙で、ぜひぜひご協力ください。なお用紙は会報の毎号に年会費の納入済み、未納にかかわらず同封しておりますことご諒承ください。

宛先不明のため、会報返送が毎号多数あります。住所変更の場合至急ご一報のほど願ひあげます。◎会報の広告掲載：年2回（2万円）にご協力をお願いいたします。詳細は事務局までお問い合わせください。

えて平成十年を迎えることのできた級友は二十七名。だが四三会の常連であつた平山桂君が残念ながら平成十年七月三十一日他界された。

幹事の見原三郎君は元気で三笑亭の会合をまとめられていた。そのあと御夫妻で熱海西山ホテルへ米寿記念旅行をされたが、十月一日急逝された。また、初めて広島より出席された熊切達治君は、前夜静岡で一泊して故郷を尋ね、再会を楽しんで帰宅されたが、平成十一年三月七日他界されてしまった。

なお、本年に入り望月孟夫君、池谷三郎君が続いて五月に逝去されてしまった。

今年の夏は異常気象であつた。訃報が続き、七月三十一日三宅静雄君が逝去されてしまった。同君は旧制静岡高から東大理学部へ進学され、物性研究所長を勤め、東大名誉教授として物理学会にも業績を残された方だ。朝日賞も受賞されている。誠に有能で級友の誇りであつた。残念ながら二十一世紀を迎えることなく他界された六名の級友の御冥福を祈る。

静岡四三会員数も現在員二十一名となり、寂しい限りである。お互いに頑張つて世紀末を迎え、元気に二十一世紀を見て幽明境を異にした旧友へ沢山の土産を持つて行きたいものである。

萩原多賀男君をしのんで

68期 雨宮 明生

昭和二十一年四月、旧制最後の静岡中学校に入学した生徒達の中に彼がいた。私は彼と同じ一組であつた。

背が高くその後水泳部で活躍するのに相応しい体格をしていた。しかし、それだけでなく話をしてみると、ユーモアに溢れた話題が豊富で、回りの同級生を楽しませてくれた。大学卒業後東京新聞の記者として数々の名文章を書き、私たちを楽しませてくれたが、その片鱗は中学、高校の授業中にいたがら書きをした雑文に見いだせる。いわく「モーパッサン女の一生」をアレンジした雑文は、特に数学の授業にあきていた我々を楽しませてくれた。

もうその筋書きは忘れてしまったが、上品かと思えばエ

ロチックなところもありで、今にして思えば永井荷風の「四畳半襖の下張り」を思わせるようなものだったと記憶している。

毎年届く年賀状は、非常にユニークでその年の干支の動物を家族で囲んだものや、正月から爆笑してしまう文章であつたりした。余りの素晴らしいに、私は彼の賀状はすべて保存しているほどである。

学生時代も、社会人になつてからもお互いによく寄り合いをした。さすが新聞記者だけあつて話題が豊富で、特に「三億円事件」「連合赤軍浅間山荘」にまつわる取材秘話は我々素人にとっては興味津々たるものであつた。また、彼は非常に勉強家で「テキヤ」と「ヤクザ」について他人の追隨を許さないほどの資料を集め、研究もしていた。

一見頑丈そうな肉体の持ち主だと思つていたが、実は本人は二度の癌を患つたり、本人に言わせると病気のデパートだと言つていた。

しかしながら、相変わらず酒もタバコも手放すことはなかったし、関東同窓会のゴル

フコンベにはかならず出席していた。

今から四年前、当時札幌高等裁判所の判事をしていた萩原昌三郎君を訪ねて、同期の鈴木昭夫、塚本浩司、星野敏郎の諸氏と彼と私が札幌雪祭りを見に行つたときも、病気のことは一言も口に出さず、我々に付き合つてくれた。

今になつて思うと、良き思い出をつくつたと考えている。そんな彼が今年の五月の連休中に亡くなった。「このたび私の意志とは無関係に西の方へ向けて旅立つことになりました」という会葬御札を用意して。さらにその最後には「さんずの川を渡つて向こう岸に着いたら、先に逝つた人たちにみなさんの近況を知らせてあげるつもりです。(中略)素晴らしい人生をありがとう」と結んであつた。

こちらこそあなたから与えられた素晴らしい数々の贈り物に感謝しています。私もそんなに時間をかけないで向こう岸へ行きます。その時は、また、娑婆と同じように付き合つてください。

ではその時まで。 合掌

「会報」編集子より

○毎号バラエティーに富んだ原稿を寄せてくださる方々に、心から感謝申しあげます。

同窓会員の絆をより強くとの願いをこめて、さらにより充実した誌面になるよう、一層のご協力をお願いいたします。

○各期幹事諸兄姉のご尽力で同期会を開催し、その報告を会報にどしどしご寄稿ください。

○原稿尊重を建て前としておりますが、加筆や訂正させていただく場合もあります。その点ご了承ください。

○提供の写真について、返却の必要があるかどうか書き添えていただければ幸いです。

○原稿依頼や掲載広告について、候補と思われる方を事務局までお知らせくださいますようお願いいたします。

(U)

◎事務局へのご連絡は……

〒153-0051 目黒区上目黒2-18-13

山中ビル タカラ歯科医院内

静中・静高関東同窓会

薬科名雄(87期)

(電)〇三-三七九二-三三八〇

(月)金の午後1時~8時

鈴与株式会社

取締役社長 鈴木 通弘 (76期)

清水市入船町11-1

TEL 0543 (54) 3015 (秘書課)

京浜支社 東京都港区芝公園1-2-12

TEL 03 (3432) 7151



新日本証券

相談役 大石 巖 (53期)

本店 東京都千代田区神田駿河台3-11

☎ 03 (3219) 1111

日本レーベル印刷株式会社

代表取締役 岩井 平一郎 (57期)

本社 静岡市国吉田3丁目1番1号

TEL 054 (262) 1111 (代)

東京 中央区京橋1-1-6 越前屋ビル8F

TEL 03 (3272) 4651 (代)

自動車・電機部品の自動塗装及びシルクスクリーン印刷

株式会社 勝山塗装工業所

代表取締役 奥澤 徹 (59期)

本社 横浜市瀬谷区橋戸3-25-6

Tel 045-301-5545 FAX 045-301-5547

大和工場 大和市深見3706-1

Tel 0462-62-0340 FAX 0462-62-0343

東松山工場 東松山市新郷88-47

Tel 0493-24-2511 FAX 0493-24-2513

株式会社 富士越 株式会社 富士越化成

代表取締役 野澤 正憲 (64期)

東京都渋谷区東2-14-9

TEL (3409) 3342 (代)

TEL (3400) 9541 (代)

自動車・火災・傷害保険

比べて下さい。安く確かな保険を。

大高保険事務所

代表 清水 雅尚 (77期)

渋谷区東3-15-8

TEL 3406-9350

PHS 050-103-8920

同窓会で人の輪を!!

野方重人法律事務所

弁護士 野方 重人 (77期)

<事務所>

〒101-0045 千代田区神田鍛冶町3-7-3

蔵下ビル6階

(TEL) 03-3251-2348

(FAX) 03-3257-0820

☎ 昼2時より夜11時まで診療 ☎

タカラ歯科診療所

代表 藁科 名雄 (87期)

東横線 中目黒下車徒歩5分

TEL 0120-376480

相続税・法人税・所得税などのご相談はどうぞ!

鳥巢修税理士事務所

税理士 鳥巢 修 (89期)

OSAMU TOSU

<事務所>

〒167-0041 東京都杉並区善福寺3-31-3

TEL 03-3396-3858 FAX 03-3396-3848

E-mail: tosu@mtj.biglobe.ne.jp

調剤薬局……首都圏に28店舗。

株式会社 アイセイ薬局

「医薬分業は 弊社へどうぞ」

代表取締役 岡村 幸彦 (93期, 応援指導部)

東京都中央区日本橋蛸殻町2-14-5

TEL 03-5643-8225

E-mail okamura@aisei.co.jp